

草原の国モンゴルにて思うこと

高橋 律

8月17日から18日にモンゴル国立科学技術大学で開かれた「日本・モンゴル国際シンポジウム」に参加しました。チンギスハーン国際空港から首都ウランバートルへ向かう道はデコボコで、バスの乗り心地は超・乗馬健康器具並みです。そのお陰か、はたまた羊肉、きゅうり、トマト等の素朴な国産食材、高地の低い湿度と気温が幸いしたのか、旅の終わりにメタボの心配はいりませんでした。

今回の議題は「企業の社会的責任」「コーポレート・ガバナンス」（日本）と「首都開発・天然資源開発の問題」（モンゴル）、「国際金融問題」（共通）でした。首都への集中は近代化と引き換えに、交通・住宅・水・エネルギーの問題や大気汚染を誘発しています。一方わが国では、企業経営の健全化を抜きには現代を語れません。両国の報告からは、「昭和と平成」にも似た隔世の感や、今日的な共通課題を認識させられました。



【シンポジウム集合写真】

とりわけ、遊牧の歴史や広大な国土（日本の8倍）とコンパクトな人口（日本の50分の1）というモンゴルを理解するには、机上の議論もさることながら肌での体感が重要なようでした。市内では渋滞とクラクションの怒号が待ち受けています。日本側はシンポジウムで、路面電車によるモーダルシフトを提唱しましたが、建築が進むビル群の狭間に、偶然にも社会主義時代のトロリーの軌道が痕跡をとどめていたのは皮肉でした。街のかなたでは、石炭を燃料とする火力発電所の煙突からおびただしい白煙が立ち昇っています。



【一旦下車して平坦地まで徒歩で移動中】

シンポジウム終了の翌日、訪問団は都市部から70kmほど離れたキャンプ場へと向かいました。途中、多くの「ゲル」と呼ばれる移動住居や山羊や羊、牛の群れが見えます。草原が続き、舗装路は砂利道・車の轍・野道となり、モンゴルの原風景が現れてきました。さらに進むと道の傾斜も厳しくなり、バスはかなり傾いて走行することに。誰ともなく「片側に集まろう」という事になり、全員でバランスをとって傾斜に耐えるはめに。が、後方の併走車両が合図を出し、バスは緊急停止。もう限界ということで一同は一旦下車し、傾斜が落ち着く箇所まで徒歩で移動することとなりました。

モンゴルにとって、国際化の進展や市場経済化の影響を免れることは困難です。収入増のための過剰放牧や、道路建設、井戸掘削などの影響で国土の砂漠化が深刻化しています。カシミア山羊は牧草を根こそぎ食べる点が問題との事ですが、我が家の庭になら一匹欲しいくらいです。民主化以降、天然資源を切り売りする鉄鋼生産、観光サービス産業といった経済振興策が続いてきました。極めつけはウランバートルから50キロほど離れたエルデネの巨大チンギスハーン騎馬像です。高さ40mの像の下にある記念館は来年完成し、会議室などが入る予定です。



【「金の鞭」のチンギスハーン像】

施設の名称でもある「金の鞭」の模型が入り口にあり、騎馬像は250tのステンレスでできています。将来、ここを中心に高級ゲルや体験施設が建てられ、一大観光リゾートが開発されるそうです。我々が宿泊したゲルもその一つで、トイレ・シャワー付きでした。そのような地で、夜には満天の星、昼は360度に広がる草原を眺めるうちに、悠久の歴史と自然が育んだ循環型で無理・無駄のない遊牧生活の知恵が、徐々にフェードアウトするかの畏怖の念を一瞬抱きました。この国家プロジェクトの将来を注視せねばと考えた次第です。